言葉、戦争と東アジアの国族の境界
――「中国本部」概念の起源と変遷[1]

黄　　克　武

一　はじめに：華夷秩序から現代国際政治と国境まで
二　何種類の地図から
三　中国本部観念の遡源：行省制度から中国本部概念の導入まで
四　顧頡剛と費孝通の「本部」、「辺疆」等の言葉をめぐる論争
五　結論

一　はじめに：華夷秩序から現代国際政治と国境まで

20 世紀前半の東アジア国家境域の形成は、中日両国の政治・軍事・外交面をめぐる競争に関わっているし、「中国」、「中華民族」とは何か、また、中国の領土範囲などをめぐる中国人の間の論争にも関係している。そして、これらの議論は、当時広く使われていたが、現在次第に忘れられている「中国本部」という概念と関連している。本稿は「中国本部」という概念の起源、変遷と衰退について検討する。「中国本部」と「辺疆」とは相互に規定する一対の概念である。本部という言葉の使用は本部以外の「辺疆」と区別されることをも意味している。本部は中国人固有の領土（或いは「中土」、「漢地」、また広義の「中原」などとも呼ぶ）を指し、それに対して、辺疆地域の「四夷」は時に中国に加入し、時に中国から離脱していた。「中国本部」という言葉の内包の変化は、中国（歴史上と現在を含む）の範囲はどこまでなのか、エスニシティ（「族群」）と地理との関係、本部以外の満洲・モンゴル・新疆・チベットなどの地域や他の地域は中国に属するか否か、そして、より根本的な課題として、民族とは何なのか、エスニシティや民族と国家との関係と

1　本稿は二名の匿名審査員の方よりご指摘をいただいた。お二方に深く感謝する。筆者は中央研究院の主題計画「文化、歴史と国家形成：近代中国における族群の境界と少数民族の成立歴程」の部分計画「近代中国民族主義の核心的概念」に参加し、本稿はその研究成果の一部である。20 世紀前半における「中華民族」観念の形成、変遷、及び中日戦争、中日文化交流との関係について、黄克武「民族主義的再発現：抗戦時期中国朝野対「中華民族」的討論」中国社科院近代史研究所編『近代史研究』総 214 号（2016）、4 -26 頁を参照されたい。

は何なのか、などの問題とかかわっている。

中国本部という言葉は西洋語の China Proper（同義のラテン語・スペイン語・英語などを含む）から由来したものである。この言葉に関する議論は、伝統的な華夷秩序から近代国際政治・国家境界への転換過程で引き起こされた論争の中で考察しなければならない。中国本部と辺疆（或いは属領）概念は本来、西洋学者が中国の歴史・地理・政治的統治を理解するために作った言葉であり、中国の伝統的な華夷秩序下の「内地―本土」と藩部・四夷という地域観と西洋自身のエスニック・ジオグラフィー（ethnic geography）に合わせて発明された言葉である。この言葉は後に翻訳を通して日本に伝わり、さらに中国に伝わった。近代以後、近代国家の形成に際して、日本人は中華帝国の境域を解釈し、また自らの境域拡張を正当化するために、China Proper を「支那本部」或いは「本部支那」に訳した。

この言葉はそもそも描述的なものであったが、後に日本の帝国主義的侵略の野心の現れとしての「満蒙は中国に属さず」論、「元清は中国に非ず」論などの観点と結びつけられて、東アジアの地政学を解釈するための言葉となった。この言葉は清末に中国語に訳された後、辛亥革命以前の革命派と改良派の人々の「中国」の範囲に対する認識に影響を及ぼした。前者の革命派は漢人を中心とする種族革命を堅持しており、彼らが考えた国家領域が比較的に狭かった。それに対して、後者の改良派はエスニック・グループ（「族群」）の融合を主張しており、彼らが認識していた領域も比較的に広かった。民国以降、この言葉は中国語世界で非常に広く使われることになった。1930 年代に「中華民族」という意識が日本人の侵略によって益々強まった。そうしたなかで、一部の学者は清末の「種族革命」と民国初期の「五族共和」の民族観を批判するとともに、日本帝国主義と日本の一部の御用学者の観点を非難し、中国本部と辺疆との区分を打破しようとするようになった。この観点はまた中国国内で「中華民族は一つである」に関する論争を引き起こした。近代史の中での「中国本部」と「辺疆」という言葉の変遷は、知識や概念の国際的な転移を反映したとともに、中日両国における国族観念の変遷と国家境域をめぐる競争、及び国内におけるエスニック・グループと境域との関係をも表している。

この課題についての比較的に重要な先行研究は、四川大学の陳波教授が発表した「日本明治時代の中国本部概念」（2016）と「中国本部概念の起源と構築――1550 年代から 1795 年まで」（2017）という両論文である[2]。両論文はこの概念に対する従来の認識を修正し補完した[3]。著者の主な貢献は四つある。第一、西洋文献における言葉の源を明ら

2　陳波「日本明治時代的中国本部概念」『学術月刊』2016 年第 7 号（上海）、157-173 頁。陳波「中国本部概念的起源与建構――1550 年代至 1795 年」『学術月刊』2017 年第 4 号（上海）、145-166 頁。

3　例えば、両論文はウィキペディアにおける説明を修正した。「China Proper」（漢地）、ウィキペディア、https://en.wikipedia.org/wiki/China_proper（最終閲覧日：2019 年 11 月 20 日）。

かにし、「『中国本部』は後世の人によるスペイン語の la propia China、ラテン語の Sinae Propriae と英語の China Proper などの言葉に対する中国語翻訳である。これらの言葉は 16-18 世紀にヨーロッパに生まれ、次第に形作られたものである。その土壌はヨーロッパの血族専属観とエスニック・ジオグラフィー」だと主張している。第二、日本明治期における「支那本部」という言葉は西洋語から訳されたものだということと、この言葉が現れた後の日本の学界・思想界での変化過程とを解明した。著者によれば、「明治維新後、西洋文献の影響を受けて初めて支那本部などの訳が現れた。日本の学者は徐々に関連の概念とそれらの分類の体系化に着手し、それまでの華夷秩序観を転換させて、日本中心主義を構築し続けたと同時に、中国の諸部分に対して改めて分類して、『支那本部』はすなわち『支那』だという観念を次第に強調するようになった。このような観念は日本拡張主義者によって利用され、中国を分裂させるための指導観念となった」。第三、著者は中国の学者や政治家が本部観念を使った状況についても言及し、次のように指摘している。「1901 年に梁啓超が日本語の『支那本部』を『中国本部』に改めて以来、1910 年代から 1930 年代までの間に『中国本部』概念は中国で広く使われることになった」[4]。1939 年になって、顧頡剛が文章を著し、この観念と日本の帝国主義的野心との関連性を強調して、この用語の廃止を主張した。第四、著者は一部の西洋の漢学者（新清史の支持者も同じような考えをもっている）のこの概念に対する解釈の誤りを批判している。例えば、著者は、ジョセフ・エシェリック（周錫瑞）は「清が 20 世紀の初めにどのように China になったのかについて論証した。それはつまり、清は China ではないことを意味している。……彼は清を『帝国』と捉えているため、本部の説を唱えたのだ」[5]と指摘している。

陳波の分析によって、我々は「中国本部」という言葉の歴史に対する理解を深めることができた。また、彼の新清史に対する批判も中国大陸・台湾両地の学界の主流の論述と一致している。ただ、中国本部についてはさらなる分析が必要である。特に、この言葉が中国に入ったのは、1896 年に『時務報』に掲載された古城貞吉（1866-1949）が翻訳した「中国辺事論」に遡ることができる。また、この言葉によって引き起こされた中国知識界の論争の思想史的意義もさらに掘り下げることができる。本稿はこれらの課題に対してさらなる分析を行うことにしたい。

二　何種類の地図から

近代東アジアにおける地理観念の転換及び中国本部（近代日本では「支那本部」と呼ば

4　陳波「中国本部概念的起源与建構――1550 年代至 1795 年」162 頁。1896 年には梁啓超が編集長を務めた『時務報』にすでにその言葉が出現したことに著者は気づいていないようである。

5　陳波「中国本部概念的起源与建構――1550 年代至 1795 年」164 頁。

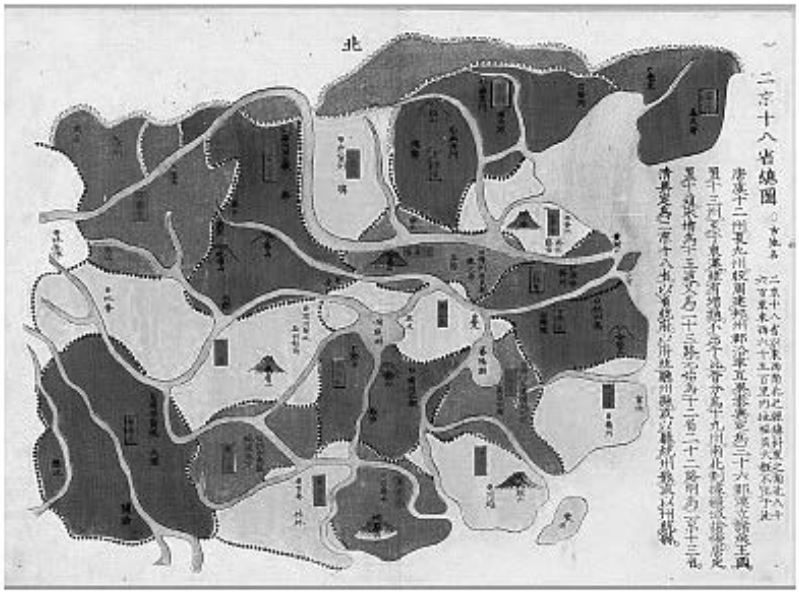
れていた）観念の出現について、何種類かの地図から説明することができる。第一の史料は『清二京十八省疆域全図』である。この地図集は日本人東條文左衛門（1795–1878、号琴台）が 1850 年（日本嘉永３年、清道光 30 年）に制作したものである[6]。この地図集の中の二枚の地図は、1850 年の時の一部の日本人の世界観とその中の中国の位置づけを反映している。一枚目は「華夷一統図」であり、二枚目は「二京十八省総図」である。この二枚の地図は 19 世紀中葉に中国を中心とした華夷秩序的な天下観の大概を示した。そして、いわゆる「皇国漢土（西洋人の支那に対する呼称）」の範疇は主に「二京十八省」、「内地十八省」（下図参照）を指している。「二京十八省総図」の説明部分によれば、「唐虞十二州、夏九州……元始為十二省二十二路。明為二京十三省。清興定為二京十八省、以省統府、以府統廳州県」。この中の「二京」とは京師と盛京（吉林、黒竜江も含む）であり、また福建省は台湾府（図に「厦門」と表示された）を含んでいる[7]。地図制作者によると、『清会典』に基づけば、清朝は内地二京十八省以外に、さらにモンゴル・カルカ・青海・チベットなどの夷地、及び付属諸国を有していたことを知っているが、これらの地域は日本人に「皆無裨益」のため、地図集に収録しないことにした。以上からわかるように、この地図集の編集者は、清朝の主要領土は「内地十八省」、「二京十八省」だと考えている。したがって、1850 年には「本部」の観念がまだ現れていなかったと言える。興味深いことに、この図の中で日本は華夷秩序の範囲内に含まれていなかった。その見方は、『華夷変態』、『中朝事実』等の書物に見られるような、日本のことを華夏と自称し、清を夷狄と見なしたという観点と異なっている[8]。

6　東條文左衛門『清二京十八省疆域全図』（出版情報不詳、嘉永３年、1850 年）。国立国会図書館デジタルコレクション https://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2533494 を参照されたい。

7　作者は図に「瓊州」、「香山」と「厦門」という三つの離島を描き、それぞれが今日の海南、香港と台湾を指しているはずである。そして三つとも内地十八省に属するものであった。また、琉球の色は異なった。

8　明朝の滅亡後、満洲族の支配のもと、髪の剃りと服装の変易（「剃髪易服」）が強制された清代中国はすでに夷狄に成り果て、日本こそは「中華正統」と「中国」だと主張した日本学者がいた。1672 年林春勝・林信篤の『華夷変態』、1669 年山鹿素行の『中朝事実』はともに、「本朝」を「中国」と見なすべきであり、昔の中原ではすでに韃虜が横行しており、華夏はすでに夷狄になってしまったと強調している。当時の日本を中心とした華夷観、及び中国を異国と見なしたことについての分析について、Ronald P. Toby, *State and Diplomacy in Early Modern Japan: Asia in the Development of the Tokugawa Bakufu* (Stanford: Stanford University Press), pp. 168–230 を参照されたい。

図解：華夷一統図



図解：二京十八省図

第二の地図史料は 1899 年に孫文によって制作された『支那現勢地図』である。この地図は 1899 年の年末までに描かれたもので、1900 年２月に香港で、また７月に東京で出版され、アジア主義を唱える東邦協会によって発行されたものである[9]。この地図は色刷りで、大きさ 73cm × 73cm の正方形で、295 万分の１の縮尺である。『支那現勢地図』を制作する過程で、孫文は清の康熙期に中国を訪れたカトリック宣教師が描いた『十八省地図』を参考にしただけではなく、ロシア・ドイツ・イギリス・フランス諸国で制作された中国の南北各省の地図と地文図・地質図・航海図などの専門地図、及び日本の書籍と雑誌における統計資料をも同時に参考した[10]。孫文は「手製支那現勢地図識言」のなかで次のように述べている。

> 近来中国の有志の士は、風雲に感慨し、時局に悲憤し、山河の支離滅裂を憂慮し、種族の滅亡を危惧している。彼らの多くは発奮して雄を目指し、時勢に乗じて報国しようとして、科挙のための辞章を放棄し、治平の実学を講じる者である。然るに実学の要は、まず地図に通暁することであり、もっとも重要なのは本国の地図に通暁することである。……中国地図は、ロシア人が測量し製図したものが最も精密である。なぜなら、ロシア人は早くも蕭何の智を有しており、この中華の土地をすでに彼らのものと見なしているからである。それゆえ、ロシア人は他国の地理学者よりも、支那の山河、険要、城郭、人民の考察に特に留意している。近年、ロシアの都で中国東北七省地図と中国十八省地図が刊行された。その精密さは今までのものが比べられないものである。ドイツの烈支多芬が描いた北省の地文・地質図はそれぞれ十二枚あり、極めて精密である[11]。フランス植民局が今年刊行した南省の地図もまた良い制作である。（私の――訳者注）この地図は（上記の）ロシア・ドイツ・フランス三国の地図、及びイギリス人が制作した海図を編集して制作したものである。ただ紙面の制限により、大要を取るだけで、詳細なものについてなお分図の制作を待たなければならな

9　東邦協会の歴史、及び孫文との関係について、安岡昭男「東邦協会についての基礎的研究」法政大学文学部編『法政大学文学部紀要』通号 22（東京、1976）、61-98 頁。狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察（５）第三章 亜細亜協会について、第四章 東邦協会について」『東亞』414 巻（東京、2001）、66-75 頁。朝井佐智子「日清戦争開戦前夜の東邦協会：設立から 1894（明治 27）年７月までの活動を通して」（愛知県：愛知淑徳大学博士論文、2013）を参照されたい。

10　孫文が製図の時に参考した各種の資料について、武上真理子「地図にみる近代中国の現在と未来――『支那現勢地図』を例として」村上衛編『近現代中国における社会経済制度の再編』（京都：京都大学人文科学研究所、2016）、329-367 頁を参照されたい。

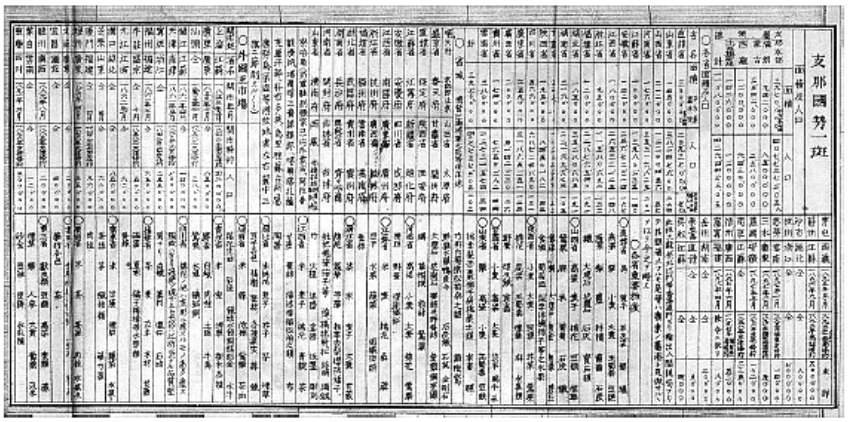
11 「烈支多芬」は現在、李希霍芬と表記されており、ドイツ人、フェルディナント・フォン・リヒトホーフェン（Ferdinand von Richthofen、1833-1905）のことで、旅行者、地理・地質学者、科学者である。シルクロードを提起したことで世に知られている。

い。また、道路、鉄路、河川、航路、高原の高さについては、最近遊歴家が測量し製図した各地の専門地図を参照することにした。すでに割譲された辺境や、分割された鉄路については、目を背けたくなるような惨状を地図の読者に感じさせるために、色を付けて示した。昔の詩人はこのように詠った。「陰平の窮寇防ぎ難きに非ざるも、此くの如き江山坐して人に付す（隠平から急襲してきた鄧艾ごときは簡単に退けられたはずだが、これだけ険阻な江山をむざむざと敵に明け渡すとは――訳者注）」。筆をおいて思わず長く嘆息した。時は己亥の冬至である。孫文逸仙[12]。

この地図の下に「支那国勢一斑」という表が付けられている。表には中国の面積と人口、十八省の範囲、二十四個の省城（十八省以外に、順天府・盛京省・吉林省・黒竜江省・チベット・新疆省も含む。後の版による補充だったはずである）、外国との通商市場、重要な物産などが表示されている。その中、面積と人口は「支那本部」と「属領」に分類されており、後者の「属領」は満洲・モンゴル・チベット・トルキスタンを含んでいる。ここからわかるように、清末に孫文が認識した中国は「支那本部」（または「中国本部」）と四つの「属領」の地からなっており、この二つの部分を合わせて中国となっていた。この図は、清末の革命者がいかに近代国家の境界の理念をもって、中華帝国の「現勢」を描いたかを示したものである。

12　孫文「手製支那現勢地図識言」秦孝儀編『国父全集』（台北：国父全集編輯委員会、1989）6冊、548頁。

孫文が制作した『支那現勢地図』



『支那現勢地図』付属の「支那国勢一斑」

1850 年に東條文左衛門が制作した地図と 1899 年に孫文が制作した地図からうかがえるように、「本部」の観念は 19 世紀後半に起源したのである。20 世紀初頭、「中国本部」という言葉が中国語世界に入ったあとに迅速に広まった。顧頡剛によれば、1930 年代に至って「中国本部……という名詞は、それが載っていない地理教科書がないほど熟知されており、誰もが当然だと思っている」[13]。そして、中国本部以外はすなわち辺疆だとされた。中国本部という言葉はさらに清末民初の「五大民族」、「五族共和」の説と結びつき、「（それは）中国の人たちに……本部に住んでいる人民は主要な部分であり、本部以外にさらに幾つかの部分の人民がいる、という認識をもたせた。人々の連想が満・蒙・回・チベットに及び、この四つの比較的に大きな民族が東北から西南までの辺境を占めており、これ以外にさらに若干の小さな民族がこれらの大民族の境域内に分布している、という認識をもつに至った。五大民族の説はこれにより起こったのである」[14]。

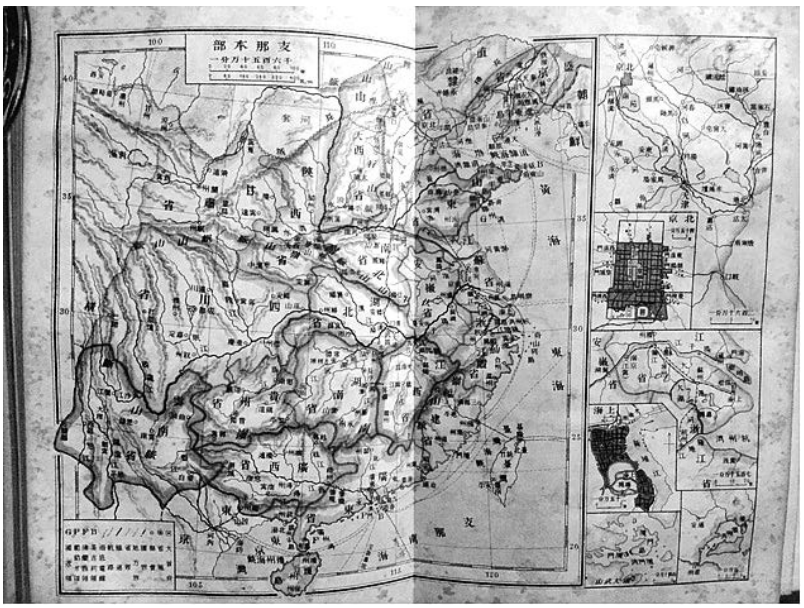
20 世紀には、「中国本部」の観念をもって中国の領土を表す仕方は、日本人が制作した地図の間でも流行っていた。1908 年に富山房の『国民百科辞典』の中には「支那本部」のカラー地図が配されていた[15]。1930 年代に日本の地理書には多くの「支那本部」地図が載っていた。例えば、1930 年の『開成館模範世界地図』の中に「中華民国」の地図があったが、同時に何枚かの「支那本部」の地図が付されていた。例えば、鉄道図・産業図などがそれであった。また、満蒙についても一枚の単独の地図が制作された[16]。

13　顧頡剛「「中国本部」一名亟応廃棄」『顧頡剛全集：宝樹園文存』（北京：中華書局、2011）4 巻、88 頁に収録された。

14　顧頡剛「中華民族是一個」『顧頡剛全集：宝樹園文存』4 巻、98 頁に収録された。

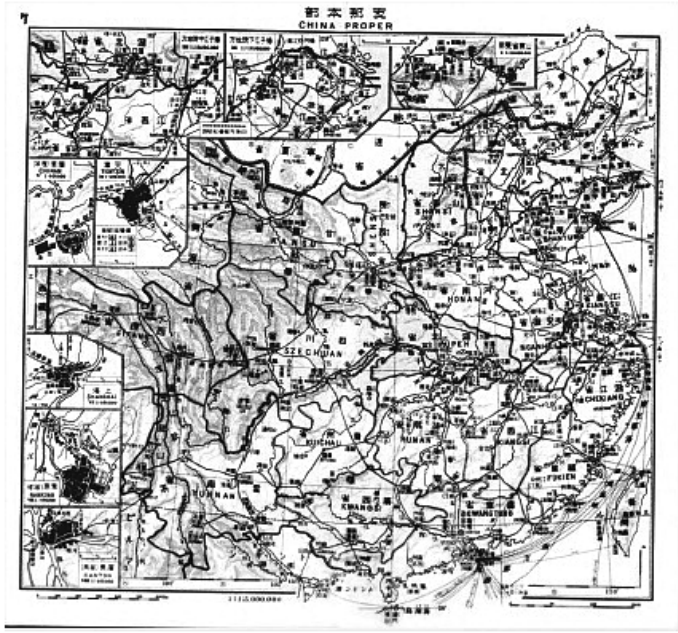
15　富山房編集局『国民百科辞典』（東京：富山房、1908）。

16　東京開成館編集所『開成館模範世界地図』（東京：開成館、1930）。



図解：富山房「支那本部」図

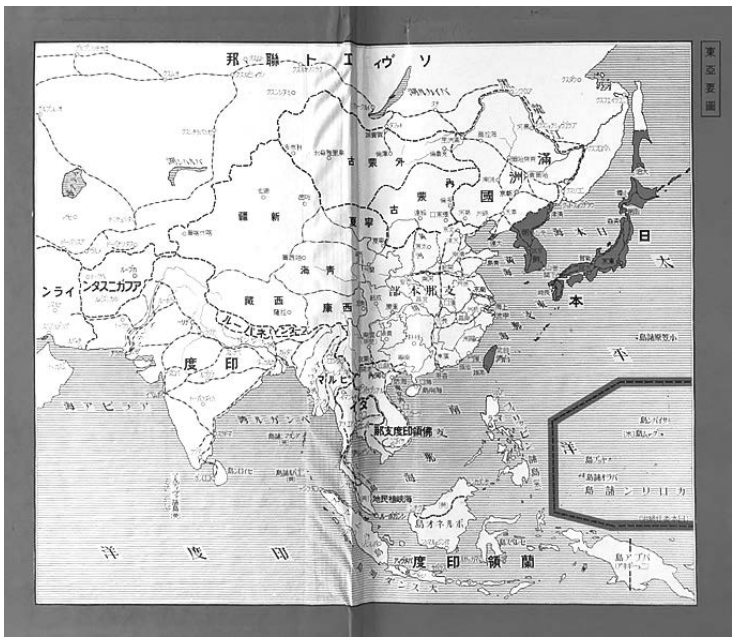
図解：開成館「中華民国」図

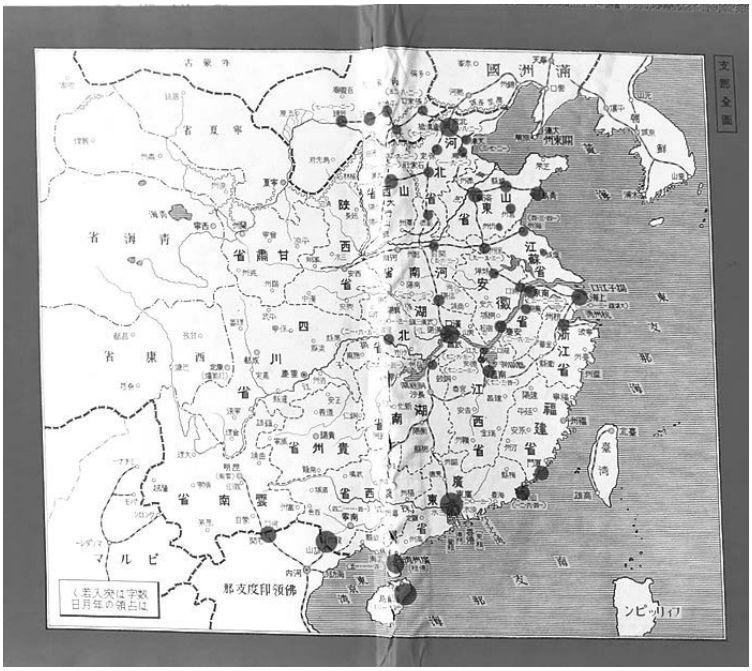


図解：開成館「支那本部」図

日本が中国を侵略した1940年代になって、この時期に制作した地図には、帝国主義的な中国侵略の意図がより強烈に現れた。例えば、名取洋之助（1910-1962、著名な写真家、ドイツに留学、国家主義者）は1940年に『中支を征く』という写真集を出版した。その写真集に404枚の写真と24枚の地図が載っている。その中の「東亜要図」のなかに、東三省は「満洲国」と表示され、台湾・大連・朝鮮・樺太島南部は日本本土と同じ色で示されており（下図参照）、一方、モンゴル・チベット・新疆等は中国の版図に組み入れられていなかった。「支那全図」の中に、中国は「支那本部」しか含まなかった[17]。

17　名取洋之助『中支を征く』（東京：中支従軍記念写真帖刊行会東京支部、1940）。





図解：『中支を征く』における「東亜要図」、「支那全図」

日本人だけではなく、西洋人もまたこの観念を持っていた。1944 年米軍の戦時宣伝映像『なぜ我々は戦うのか：ザ・バトル・オブ・チャイナ（Why We Fight: The Battle of

China)』に示された地図で、中華民国は中国本部・満洲・モンゴル・新疆・チベットに分けられていた[18]。

「本部」という言葉は一体何時から使われたのか、そして、それはどのように中国に伝わったのか、なぜ20世紀に「中国本部」というテーマをめぐって学者の間で論争が起きたのか、この論争は東アジア諸国の境域形成にどのような影響を与えたのか。以下はこれらの問題に対して解答を試みる。

三　中国本部観念の遡源：行省制度から中国本部概念の導入まで

20世紀前半の中国本部という観念の中国語世界での流行は、多言語翻訳によって生じた複雑で多岐にわたる観念の移り変わりと関わっている。以下でいくつかの点に分けて説明する。

第一、中国の伝統の中には「本部」の観念がなく、この言葉は近代日本語に由来したものである。1952年に銭穆は『中国歴代政治得失』において、「行省」は元来流動する中央政府のことを指しているため、「行省」という呼び方は妥当ではなく、「名分が正しくなく、道理にもかなっていない」ものだと指摘している。また、彼は「本部十八省はなおさら荒唐無稽だ」と批判した。それは、中国の歴史上、本部と非本部の区別は全くなかったからである。銭は次のように述べている。「夙に、秦の始皇帝が築いた万里の長城は、東側はすでに大同江に達しており、遼河流域は永遠に中国の歴史圏内にある。どうしてそこは中国の本部ではないと言えるのか。これはそもそも外族の敵が故意に是と非を混淆する

18 「漢地」、ウィキペディア、https://zh.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%89%E5%9C%B0（最終閲覧日：2019年11月20日）。

ためにつくった侵略の口実であった。……これらは全て警戒に値することである」[19]。銭穆がこのような観念をもっていたのは、顧頡剛の影響を受けたからであろう。

言語学的な変化からも、「本部」は近代日本の和製漢語であり、中国の伝統的な言葉ではないことを説明できる。陳力衛は言語学の観点から「本―支」概念についてこのように指摘している。すなわち、中国の伝統に「本末」、「源流」、「支幹」のような言い方があったが、「本―支」という造語は、近代日本語が「対義」、「区隔」の理念のもとで概念の細分化を追求し、対応と区隔の意味をより突出させた結果であり、その目的は近代化・専門化の需要に適応するためであった。「本部―支部」、「本線―支線」、「本隊―支隊」、「本庁―支庁」は全て近代日本に出現した対義語であり、これらの対義語はさらに中国に伝わった。相対的に言えば、中国語の伝統の語彙の中で、「本」と「末」とは対義語であり、「支」と「幹」とは対義語であって、「本」と「支」とは対義語として使用することはなかった。また、現代中国語の中では、言葉が部分的範疇のみでも単独に成立することが可能であり、相互対応をもって区別することは厳格に求められていない。例えば、日本語においては「大学本部」と「大学支部」が厳格に対応されているのに対して、中国語においては「北京大学―北京大学分部」、「委員会―支委会」等の表現が使われている。陳力衛はまた「中国本部」を例に、次のように指摘している。「以前日本が漢民族十八省を中国の主要部分と見なした結果、『中国本部』の使い方は出現した。上述のような日本語の対応性の性格から考えれば、本部観念には対義語としての『支部』が必要となる。このような理解に基づいて、日本人は一時期、中国が法的支配上位置づけることの難しいモンゴルや満洲を含む地域を、意識的また無意識的に『支部』と呼ぶことになり、中国がそれらの地域に対する統治を弱体化させたのである。これは中国伝統的な天下観と衝突しているものである」[20]。上述の歴史学者と言語学者の論断は、「本部」という言葉が近代日本語との関連性を十分に示している。

第二、中国の伝統の言葉において「本部」観念と関係している言葉は「省」或いは「行省」である。「本部」観念の形成は伝統中国における「行省」観念の影響を受けている。中国は元代から「行中書省」（略称「行省」）という地方行政制度が設けられていた。銭穆によれば、その制度の内在精神は「軍事支配」であり、すなわち「全国各省をバラバラの状態にさせれば、各省が力を合わせて反抗することもできなければ、いかなる地域の単独の反抗もし難い」[21] ようにするためであった。明代は十三の承宣布政使司に分けた。清代は元明時代の制度を踏襲して、地方行政機関を「省」と呼び、そこから「両京十三省」の

19　銭穆『中国歴代政治得失』（台北：三民書局、1976）、98-100 頁。

20　陳力衛「なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか」愛知大学中日大辞典編纂所『日中語彙研究』第６号（名古屋、2016）、１-25 頁。また、陳力衛『近代知の翻訳と伝播――漢語を媒介に』（東京：三省堂、2019）、369-390 頁をも参照されたい。

21　銭穆『中国歴代政治得失』98 頁。

言い方が生まれた。省の数は歴代に増加があり、最初の12、13、15省から清代の17、18省にまで増えた。1860年代のロプシャイト（羅存徳）の『英華字典』にはChina Properが初めて「十八省」に翻訳されたことから、その対応関係を見ることができる[22]。1884年井上哲次郎の『訂増英華字典』は、一方では、この翻訳を受け継ぎ、China Properを「十八省」と訳したが[23]、他方では、1875年鄺其照の『字典集成』を踏襲し、China Properを「正中国」と訳した。鄺其照と井上による翻訳は次のとおりである。「the Chinese Empire consists of China Proper Mongolia, Manchuria and Tibet（大清国天下は正中国、モンゴル、満洲とチベットを合わせて成している）【大清国天下合正中国蒙古満洲并西藏而成】」[24]。ただ、「正中国」という翻訳が後にまれに見るようになったため、1899年に鄺其照は『華英字典集成』の中で少し修正を加え、「正」の文字を削除するようになった。すなわち、「the Chinese Empire consists of China Proper Mongolia, Manchuria and Tibet【大清国天下统中国蒙古満洲及西藏而成】（大清国天下は中国、モンゴル、満洲、及びチベットからなっている）」、になっている。顔恵慶もまたこの翻訳にしたがって、ここのChina Properを直接に「中国」と訳した[25]。

清代の文献に、十八省の外に「藩部」と「四夷」があり、それはすなわち上述の華夷秩序的な天下観である。清代の文献の中には、「十七省」、「十八省」と結びついた言葉は何種類もあった。例えば、「内地十七省」、「内地十八省」、「中土十八省」、「漢地十八省」などがあった。「漢地十八省」の使い方から見れば、十八省の観念は漢人の居住地とも関連しており、西洋のエスニック・ジオグラフィーと呼応している。

第三、西洋語のChina Proper（中国本土）観念は、すなわち陳波が指摘したように、16-18世紀に「スペイン語la propia China、ラテン語Sinae Propriaeと英語China Proper等」の言葉として西洋文献に現れたということである。この言葉に対する一般的な理解はこうである。

22　羅存徳（ロプシャイト、Wilhelm Lobscheid）『英華字典』（*English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation*）（Hong Kong: The Daily press office, 1866-1869）、374頁。

23　井上哲次郎『訂増英華字典』（東京：藤本氏蔵版、1884）、239頁。

24　井上哲次郎『訂増英華字典』303頁。鄺其照著・内田慶市、沈国威編『字典集成：影印与解題』（北京：商務印書館、2016）、153頁。陳波「日本明治時代的中国本部観念」163頁は、この翻訳が「極めてまれに見る」と指摘している。「正中国」という翻訳は後に通用していた「支那本部」、「中国本部」の観念と共通点がある。すなわち、十八省のみが真の中国だという考え方である。これは後の翻訳に伏線を張ったと見てもよかろう。

25　鄺其照『華英字典集成（An English and Chinese Dictionary）』（香港：循環日報、1899）、76頁。顔恵慶『英華大辞典』（上海：商務印書館、1908）、459頁。

これは西洋世界が歴史上、漢族人口が大量に群居し漢文化が支配的地位を占める中国の核心地帯に対する呼び方である。漢族が優勢であった地帯は王朝の違いによって拡張したり縮小したりしていたため、中国本部の範囲もそれにともなって変動していた。近代に使用されていた「中国本部」は、現在に最も近い漢民族王朝である明朝の境域内の漢族の集住区域――すなわち両京十三省（または関内十八省、内地十八省などとも呼ぶ）――と大体合致している。この区域は万里の長城以南の地域を指す場合が多い。清朝を支配した満洲族が住んでいた満洲、及びモンゴル、チベット、新疆等の地域を含んでいない[26]。

文献の起源から見れば、陳波が言及した最も早い用例は、1585 年にスペイン人フアン・ゴンサーレス・デ・メンドーサ（Juan González de Mendoza、1545–1618）が著した『大中華王国最著礼俗風物史記』（*Historia de las cosas más notables, ritos y costumbres del gran reyno de la China*, Rome, 1585）の中の、「ポルトガル人の都市マカオは広州に隣接しており、広州は『中国本部』の都市である」[27] というくだりであった。この時に「中国本部」観念は未熟であり、当該著書も「中国本部」の含意について具体的に説明していなかったが、大体「中国版図以内」ということを指しており、そしてこの王国は「十五省に分けられている」ということであった[28]。また、この言葉の英文文献における起源について、約 20 万冊の書籍を含んだ ECCO（Eighteenth Century Collections Online, Gale Cengage learning 社発行）に依拠すれば、最初に「China proper」に言及した本は 1762 年に John Mair が著した *A Brief Survey of the Terraqueous Globe*（全世界簡略探索）[29] である。この本によれば、中国本部は「長城以内の中国領土」（164 頁）を指している。次に「China proper」に言及した本は 1768–69 年の Tobias George Smollett, *The Present State of All Nations*（各国現況）[30] である。

そして、China Proper を比較的に明確に定義した最も早い本は、1795 年にイギリス人ウィリアム・ウィンターボサム（William Winterbotham、1763–1829）が著した *An*

---

26 「漢地」ウィキペディア、https://zh.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%89%E5%9C%B0（最終閲覧日：2019 年 11 月 20 日）。

27 陳波「中国本部概念的起源与建構――1550 年代至 1795 年」154–155 頁。この本は中国語翻訳版がある。門多薩『中華大帝国史』（北京：中華書局、1998）。

28 陳波「中国本部概念的起源与建構――1550 年代至 1795 年」157 頁。

29 この本について、Edinburgh: printed for A. Kincaid & J. Bell and W. Gray, Edinburgh, and R. Morison and J. Bisset, Perth, 1762 を参照されたい。

30 この本について、London: printed for R. Baldwin, No. 47, Paternoster-Row; W. Johnston, No. 16, Ludgate-Street; S. Crowder, No. 12; and Robinson and Roberts, No. 25, Paternoster-Row, 1768–69 を参照されたい。「中国本部」は７巻 53 頁に現れた。

Historical, Geographical, and Philosophical View of the Chinese Empire（中華帝国の歴史、地理と哲学的観点に関して）[31] である。第二章「中華帝国の概説」において、彼は「この巨大な帝国を包括的に描述するために、以下のように三分してみる。一、『中国本部』、二、『中国領タタール地域』[32]、三、『中国の冊封を受けた属国』」（35 頁参照）」と述べている。著者は、明朝の十五省の境域を中国本部に帰し、血縁集団である漢民族が居住しているという。また、シベリア・満洲（東北）・モンゴル・東タタール（今日の新疆・アフガニスタン・北パキスタンなどを含む）などの地域を中国領タタール地域に帰した。さらに、中国の冊封を受けた属国（朝貢国）がチベット・朝鮮・琉球・安南（ベトナム）・暹羅（タイ）、呂宋（フィリピン）等の地域を含むという。このような用法はおよそ 18–19 世紀における英語 China Proper の含意であり、それは明朝 15 省（すなわち両京十三布政司）、清朝 17、18 省という範囲を指しているものでもあった。

第四、19 世紀末の 70 年代ごろ、日本人は「支那本部」をもって China Proper という西洋観念を翻訳し、それをもって中華帝国を表現した。最も早い用例は 1870 年に内田正雄（1839–1876）が翻訳編集した『輿地誌略』（初版）という書物である。著者によれば、支那は「本部」と長城以北（「塞外」）の多くの地域とを合わせた地域をもってその版図としたものであり、「支那本部」は長城以内を指しており、「元来の漢土であり、唐虞以降、歴代邦国の盛衰、英雄の興亡は皆この内に起こった」[33] のである。また、日本国会図書館のデジタルコレクションで検索すれば、ドイツ学者グリウリンヘルド著、菅野虎太訳述の『万国地誌略』（1874 年）がある。この著書によれば、いわゆる「支那領」の範囲は「支那本部、西蔵、支那韃靼、天山北路、満洲、蒙古、朝鮮、瓊州島、台湾島」[34] を含む。要するに、この時の訳書において、支那は「支那本部」以外の多くの地域を含んでいた。言い換えれば、後に日本人が「支那本部」という言葉を利用し、中国の辺境が中国の領域に属することを「弱化」させるやり方は 1870 年代の初期にまだ現れていなかった。

31　この本について、London: Printed for, and sold by the editor; J. Ridgway, York-Street; and W. Button, Paternoster-Row, 1795 を参照されたい。

32　中国領タタール（中属韃靼、Chinese Tartary）の「タタール」は複数のエスニック・クループ（族群）に共有された名称であり、モンゴル族を起源の一つとした遊牧民族をも含む。その意味は時代の違いによって大きく異なる。時には満洲とモンゴルを合わせてタタールと呼ぶ場合もある。陳波「日本明治時代的中国本部観念」164 頁を参照されたい。

33　内田正雄編訳『輿地志略』（東京：文部省、1870）２巻、１–２頁。陳波が松山棟庵（1839–1919）編訳の『地学事始・初編』（東京：慶應義塾出版局、1870）に言及し、その中に「西蔵は支那本部の西にある」と書かれていることと述べている（陳波「日本明治時代的中国本部観念」162 頁）。しかし、原書の 1 巻 13 頁を確認すれば、実際の原文は「西蔵ハ……支那本国の西に当る国なり」になっている。

34　グリウリンヘルド著・菅野虎太訳述『万国地誌略』（東京：養賢堂、1874）。

もう一つの用例は、参謀本部管西局編の『支那地誌』（1887）の中における「本部支那」という言葉である。下村脩介は凡例の中でこのように説明している。「支那全部ノ区分ハ欧米人ノ説ク所ニ由ルモ亦各々少差アリ、今此書ハ支那行政ノ区畫ニ本ツキ之ヲ定メ、本部支那、満洲、蒙古、伊犂、西蔵ノ五部トス。其十八省ヲ以テ本部支那トシ、盛京、吉林、黒龍江ノ三省ヲ以テ満洲トシ、内外蒙古、青海及ヒ内属遊牧部ヲ以テ蒙古トシ、天山南北路ヲ以テ伊犂トシ、前蔵後蔵ヲ以テ西蔵トス」（図解参照）[35]。後に流行っていた中国

35　参謀本部管西局編『支那地誌』（東京：参謀本部、1887）。

本部・満洲・モンゴル・新疆・チベットを含む「五分法」は大体この書に遡ることができる。そして、前述した孫文が1899年に制作した地図に見られる地理観念もこの本と関係があり、孫文はこの類の書籍を参考にしたかもしれない。

地名	地積	人口
本部支那	三七四、一一五	三二、六二一、〇〇〇
満洲	六三六、六二一	一、二〇〇、〇〇〇
蒙古	二四八、四四七	四、一五〇、〇〇〇
伊犁	六六四、七六	一、四四〇、〇〇〇
西藏	一〇〇七、二二一	六〇〇、〇〇〇
合計	八五三、四二一	三六、六二一、〇〇〇

図解：『支那地誌』の統計表

支那本部（と本部支那）という言葉が出現した後、日本学者の間に中国を区分する方法が多く存在していた。陳波が述べているように、「中国に対する各種の区分法は、その核心はいわゆる本部とその他の諸部との関係を調整するため」のものであり、そこに「エスニック・ジオグラフィー」が導入され、「支那本部はすなわち漢人本部」という見方が現れた[36]。この「エスニック・ジオグラフィー」分類体系はさらに「日本の拡張主義者と軍国主義者」と結びつき、本部以外の曖昧な地域は中国固有の領域ではないことが強調された。「元清は中国に非ず」論、「満蒙は中国に非ず」論はいずれもこの地域観念と密接に関連している[37]。

第五、日本語の「支那本部」が中国に伝わったことを契機に、「中国本部」という言葉は中国語世界に誕生した。『時務報』、『知新報』が日本語の新聞や雑誌を翻訳して、最も早くこの言葉を中国に導入した。その先駆けは1896年に掲載された「中国辺事論」であった。この文章の翻訳者である古城貞吉は日本語の「支那」を「中国」に変えて、「中国本部」という言葉を生み出した。一方、同じ維新派の新聞である『知新報』、『清議報』は「支那本部」の表現をそのまま援用した[38]。そのため、清末民初にこの二つの言葉は新聞や雑誌に同時に存在していた。

古城貞吉が翻訳した文章は「東文報訳」欄に掲載されたものであり、それは『東邦学会

36　陳波「日本明治時代的中国本部観念」165-167頁。

37　「元清非中国論」、ウィキペディア、https://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%85%83%E6%B8%85%E9%9D%9E%E4%B8%AD%E5%9C%8B%E8%AB%96（最終閲覧日：2019年11月20日）。

38　例えば、「我支那本部四万万人、其種族皆合一、未嘗有如奥斯馬加国中徳意志人与斯拉夫人相競之事」。梁啓超「論支那独立之実力与日本東方政策」『清議報』第26号（東京、1899）、6頁。

録』の「中国辺事論」から訳されたものである。この訳文は梁啓超（1873-1929）が編集長を務めた『時務報』に四回（第 12、15、16、18 号（1896-1897））に分けて連載された。原文は『東邦協会会報』第 27、28 号（1896）に掲載された『清国辺備に対する露国の攻守論』[39] である。

冒頭に書かれた古城貞吉の説明は次のとおりである。

> ロシア陸軍少将の鋪加脱氏は燕京に長く駐在し、船で南を行き馬で北を行って、四百余りの州に足跡を残した。彼は中国軍事に留意しており、著書も多くある。『観論中国』一冊だけで、その下心がよくわかる。華人がこれを読んでいかなる感慨をするのだろうか。雲や煙が目の前を通り過ぎるように心に留めないのか、気がくじけるのか。ああ、今日中露は相互に保護提携しているが、後日呉越の関係のようにならないことを誰が知ろうか[40]。

古城が訳した文章の中での「中国本部」（原文は「支那本部」）に関する部分は『時務報』第 15 冊に載っており、そこに次のように書かれている。「新疆地方は中国本部にすこぶる遠く離れている。遠征する場合、その不利は明らかである。……モンゴル一帯の地は蒼茫たる荒野であり、我がシベリアと中国本部との間に介在しており、人煙まれな不毛の地である。軍政上から見れば、此処は明らかに要地である」[41]。「中国本部」という言葉はほかにも数か所に散見する[42]。

上述したロシア陸軍少将の鋪加脱氏はプチャータ（D. V. Putiata、1855–1915）のことであり、ロシア語の名前は Путята, Дмитрий Васильевич である。彼はセルビアとト

39　露国陸軍少将プーチャート著「清国辺備に対する露国の攻守論」『東邦協会会報』第 27 号（東京、1896）、１-15 頁。「清国辺備に対する露国の攻守論（承前）」『東邦協会会報』第 28 号（東京、1896）、１-24 頁。日本は 1890 年代にロシアの東方戦略に対して高い関心を持ち、一部のロシア語書籍を翻訳した。例えば、ウエニユコーウ著『露国东洋策』（東京：哲学書院、1893）、ア・ヤ・マクシモーフ著『露国东邦策』（東京：哲学書院、1896）などがあった。

40　［日］古城貞吉訳「中国辺事論」『時務報』第 12 冊（上海、1896）、20 頁上。

41　［日］古城貞吉訳「中国辺事論（続第十二冊）」『時務報』第 15 冊（上海、1897）、19 頁下。モンゴルに関する部分は「清国辺備に対する露国の攻守論（承前）」『東邦協会会報』第 28 号（東京、1896）、１頁を参照されたい。「……杳渺たる無邊の原野我西伯利并に支那本部の間に介在し而かも土地不毛人煙稀少……」。

42　例えば、「察哈爾汗林丹者、振発暴威、凴凌所部、于中国本部之北方、独立称汗、且至強使明朝納貢」（第 15 冊、20 頁上）。「以軍事而論、分蒙古地理為二、西北為山地、東北為平原、而首要之処尤映我眼中者、則為東部平原地。何則、我入中国本部、此為最近捷之地也」（第 15 冊、20 頁上―20 頁下）。「吉林府在満洲中部、大道可通四方、東至于海、南直達中国本部、其要路有三条」（第 18 冊、23 頁上）。

ルコの戦争、及び露土戦争（1877-1878）に参加したことがあり、1886-1892 年に駐中国武官を務め、1896 年に韓国政府の軍事顧問として雇われた。さらに、1898-1902 年にアジア部門の主管を務めた。上記の『観論中国』は 1895 年に出版された *Orepku Kutauckou Muzhu Ocherki Kitaiskoi Zhizni*（『中国生活概覧』）である[43]。

東邦協会は、南洋への植民に熱心な福本誠（号日南、1857-1921）と、中国内地の探検に従事した小沢豁郎（1858-1901）と中国貿易に従事した白井新太郎（1862-1932）の３人が 1890 年に日本で発起した組織である。この会は『東邦協会会報』を発行しており、その趣旨は「寰宇の上国を建つる所以のもの豈に偶然ならんや。……此の時に当り、東洋の先進を以て自任する日本帝国は、近隣諸邦の近状を詳らかにして実力を外部に張り、以て泰西諸邦と均衡を東洋に保つの計を講ぜざる可らず」[44] ということである。前述した孫文が制作した地図もこのような目的から東邦協会から出版されたものである。このように、「中国辺事論」は、プチャータによるロシア語書籍の中の文章が日本語に翻訳されて東邦協会の『東邦協会会報』に掲載されたものを、古城がさらに中国語に翻訳したものである。言い換えれば、ロシア・日本・中国を経由した連続翻訳によって、この言葉が中国語世界に誕生したということである。

1908 年顔恵慶編の『英華大辞典』のなかには、proper という語の下に「China proper、中国十八省、中国本部」という解釈が付せられており、両者の間の対訳関係は正式に現れた[45]。1916 年 Karl Ernst Georg Hemeling 編の『官話』もこの訳を採用し、China proper を「中国十八省、中国本部」と翻訳した[46]。ここから分かるように、「中国本部」という言葉は 1896 年に中国語世界に現れはじめ、20 世紀初頭に辞典に収録され、流行るようになったのである。

第六、中国本部という観念の流行と発展についてである。「中国本部」の言葉が中国に伝わった後、「本部」と「十八省」をつなげて「本部十八省」という使い方はすぐに新聞や雑誌に現れた。1901 年の『清議報』第 75 冊の「支那保全及満洲処置」において、「本部十八省、東三省（満洲）、蒙古、西蔵、天山南北二路、東トルキスタンは合わせて大清

43　D. V. Putiata の生涯について、Alex Marshall, *The Russian General Staff and Asia*（London: Routledge, 2006）, pp. 31, 32, 79-80 を参照されたい。

44　東亜同文会対支功労者伝記編纂会編『対支回顧録』（上）（東京：東亜同文会対支功労者伝記編纂会、1936）、677 頁。

45　顔恵慶編『英華大辞典』1773 頁。

46　Karl Ernst Georg Hemeling, ed., *English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language and Handbook for Translators, Including Scientific, Technical, Modern, and Documentary Terms*（Shanghai: Statistical Department of the Inspectorate General of Customs, 1916）, p. 1116。

帝国の版図と称す」[47] という言及があった。また、1904 年『江蘇』第８期に掲載された「英徳於揚子江之競争」の中に、「中国本部十八省には、海沿いのものは七省あり、川沿いのものは七省ある。……」[48] という内容があった。さらに、1907 年呂志伊が『雲南』雑誌に掲載した「論国民保存国土之法」のなかで、「我が国の人民は共同の心もなく、団結力もない。本部十八省は十八の小国に分かれたようである」[49] と述べている。

第七、種族革命と本部概念との結合である。清末に太平天国の文献や、革命刊行物は全て「反満」という種族革命の観点を採用した。また、民国初期の「十八星旗」は種族観念と地域との結合を具現化した。すなわち、漢人を主体とする国家を建設することを主張し、その境域は十八省の範疇と一致している（換言すれば、中華民国の領土を内地の十八省だと主張したことである）。種族革命の起源は太平天国に遡ることができる。太平天国のスローガンの一つはすなわち「十八省江山」、「英雄十八省」[50] を再建するというものだった。清末の革命志士はこの発想を継承した上で、目標を「本部十八省」に調整した。鄒容の『革命軍』と陳天華の『獅子吼』の例を挙げよう。鄒容は、漢族が「中国本部」を占め、次第に四方に散布していったことを強調し、「漢族：漢族というものは、東洋史上最も特色のある人種であり、すなわち我が同胞である。中国本部を占め、黄河沿岸に生息し、次第に散布して四方に拡大していった。古より東洋文化の木鐸を司るのは、実にただ我が皇漢民族だけである。朝鮮、日本も亦我が漢族の散布の一部である」と論じている。また、陳天華は『獅子吼』第２回に「天下に五個の大洲があり、第一の大洲は亜細亜である。亜細亜に大小数十か国があり、第一の大国は中華である。本部十八省で、四億の人口があり、千五百万平方里余りの領土がある。属地も含めて計算すれば、四千万余りがあり、世界陸地の十五分の一を有する」[51] と述べている。章炳麟は彼の「中華民国解」という文章の中で「本部」の言葉を用いなかったが、考え方は実に似ている。ただ、章の比較的に独特な点は、彼は「反満」を堅持したが、彼は中国の領土は十八省にとどまらず、漢朝の時代の境域を回復すべきだと主張した。同時に、辺境地域について「（中国への）加

47　［日］肥塚龍「支那保全及満洲処置」『清議報』第 75 冊（東京、1901）、4735 頁。

48　V.G.T. 生「英徳於揚子江之競争」『江蘇』第８号（東京、1904）、87 頁。

49　呂志伊「論国民保存国土之法」『雲南雑誌』王忍之等編『辛亥革命前十年時論選集』（北京：三聯書店、1977）、２巻下冊、829 頁に収録された。

50　洪秀全の詩「先主本仁慈、恨茲汚吏貪官、断送六七王統緒。藐躬実慚徳、望爾謀臣戦将、重新十八省江山」、石達開の文章「為招集賢才、興漢滅満、以伸大義事。照得胡虜二百年、豈容而汚漢家之土。英雄十八省、何勿尽洗夷塵之羞」を参照されたい。徐珂「洪秀全連合会党」『清稗類鈔』（上海：商務印書館、1917）「会党類」、146 頁。

51　鄒容『革命軍』、鄒容・陳天華『革命的火種：鄒容、陳天華選集』黄克武、潘光哲主編『十種影響中華民国建立的書刊』（台北：文景書局、2012）24 頁に収録された。陳天華『獅子吼』鄒容・陳天華『革命的火種：鄒容、陳天華選集』81 頁に収録された。

入と離脱はそれらの地域に任せて良い（「任其去来也」）」と考えたことである。章は次のように述べている。「故に中華民国の境界について言えば、ベトナムと朝鮮の二郡は必ず回復すべきものである。ミャンマー司はその次になる。チベット、回部、モンゴルの三つの荒服はそれらの地域に任せて良い」[52]。

十八行省で漢族国家を建立する発想は、ヨーロッパと日本が19世紀に興り始めたいわゆる「民族建国主義」理論、或いは「単一民族」国家民族主義の影響をも受けた。すなわち、民族国家が相互に競争している世界の中で、単一民族国家のみは強力に存続できるのであり、そうでなければ、国家は必ず瓦解するという考え方である。『江蘇』に掲載された「新政府之建設」（1903）という文章は以下のように主張している。

> 近世史をめくってみれば、二三百年来、このような天地を振動させるような大風潮、竜虎相争うような大活劇が長々と述べ立てられて、次々と人々の目に入った。何一つ民族主義によって激しく揺さぶられ、演繹されなかったものはない。「両民族は一つの政府の統治下に並立することができるはずはない」という理が発明されて以来、欧州の政局が大変動した。所謂「民族建国主義」というものは意気が揚がって、消耗することはない[53]。

そして、辛亥革命の成功後の「十八星旗」（中華民国湖北軍政府が成立時の旗幟）はまさにこの漢人による建国の理念を具現化したものであった[54]。辛亥革命が成功した後、団結を促進するために、「五族共和」が強調されるようになった。例えば、民国元年のある軍人教育の宣伝絵本には、この「五族共和」の理念が表現されており、同時に、地域と種

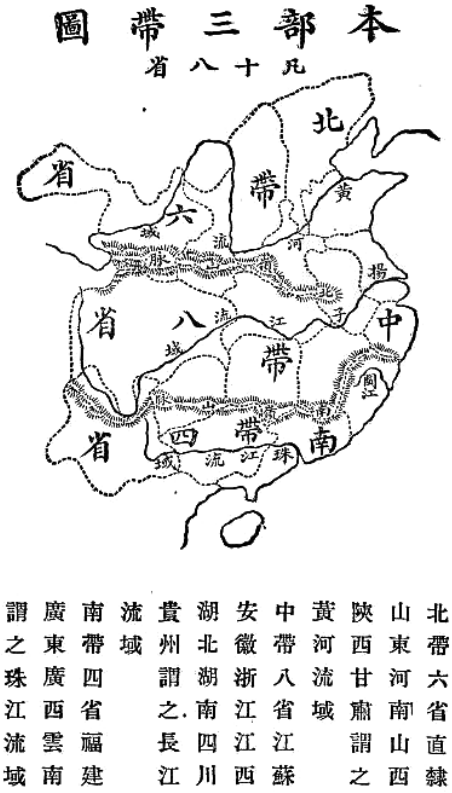
52　章炳麟「中華民国解」『章太炎全集：太炎文録初編』（上海：上海人民出版社、2014）、262頁。章氏の文章の中では「中国本部」が使用された箇所が多くあった。例えば、「鄙意今日所急、在比輯里語、作今方言。昔仁和龔氏、蓋志此矣、其所急者、乃在満洲、蒙古、西蔵、回部之文、徒為浩侈、抑末也！僕所志独在中国本部、郷土異語、足以見古字古言者不少」、章炳麟「丙午与劉光漢書」『章太炎全集：太炎文録初編』158頁、また、「今計中国本部及新疆、盛京、吉林、黒竜江四省、大校二千四百万方里、為州県千四百、丁口則四万二千万有奇」章炳麟「代議然否論」『章太炎全集：太炎文録初編』312頁、などがあった。

53　漢駒「新政府之建設」『江蘇』第5号（東京、1903）、7-33頁、第6号（東京、1903）、23-32頁。引用文は第6号、23-234頁に掲載された。張永「従「十八星旗」到「五色旗」――辛亥革命時期従漢族国家到五族共和国家的建国模式転変」『北京大学学報（哲学社会科学版）』第39巻第2号（2002）、106-114頁を参照されたい。近代中国が日本から「単一民族」国家民族主義の影響を受けたことについて、王柯『民族主義与近代中日関係：「民族国家」、「辺疆」与歴史認識』（香港：中文大学出版社、2015）を参照されたい。

54　「十八星旗」、ウィキペディア、https://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%81%E5%85%AB%E6%98%9F%E6%97%97（最終閲覧日：2019年11月20日）。

族が明確に区別された。具体的に言えば、「本部十八省」は「漢族」の居住地であり（北・中・南の三地帯に分けられた）、そのほかに満洲・モンゴル・回・チベットがそれぞれ一つの地域を占めるということになっている。「五族共和」には実際漢族中心的な色彩を強く帯びており、それは漢人を中心にした上で五族平等の追求を主張するものであった。この著書のなかで、著者は次のように主張している。すなわち、清の時に「外藩地域」は「全く権利を享受しておらず、困窮の状況が実に一言で言い尽くせない」。しかし、「現在、民国が成立したため、満蒙回蔵の人々を実の兄弟のように見做し、漢人と一律に利益を受けさせ、幸福を享受させ、外人に寸分の土地も占拠させないように必ず努めなければならない」[55]。

55　倪菊裳「中華民国的国土演説」上海新北門振武台国民教育実進会『軍中白話宣講書』第４編（上海：商務印書館、1911）、９頁に収録された。この説は漢族の複雑性と文化性、及び漢族以外の人たちがいわゆる「本部」の中に住んでいるという事実を見落としている。



図解：『軍中白話宣講書』第４編（上海：商務印書館、1911）、巻頭挿絵

第八、1912 年から 1930 年末までの間、「中国本部」、「我が国本部」という用語が中国語世界で広範に使用されていたが、その背後にあったエスニック政治の意味合いについては関心が払われていなかった。いくつかの例をあげてみよう。例えば、1924 年に蒋介石は廖仲愷宛の手紙の中で、「ロシア共産党はとうてい誠意がない。彼らの中国に対する唯一の方針は、中国共産党を正統にすることであり、我が党と提携できるとは決して思っていない。中国に対する政策をいえば、満、蒙、回、蔵の諸部を全てソビエトの一部にしようとしており、中国本部に対しても手を染めるつもりがないとは限らない」[56] と述べている。また、羅従豫は「九一八事変前に東三省と中国本部の間の貿易に対する回顧（「九一八事変前東三省与中国本部貿易之回顧」）」の中で、「昔、我が国本部と東北三省との貿易

56　秦孝儀主編『総統蔣公大事長編初稿』（台北：中国国民党党史委員会、1978）、1924 年３月 14 日、１巻、74-75 頁。

は、もともと国内貿易として扱われていたが、今は対外貿易の範疇に分類せざるを得なくなっている。本部で生産された大量の製品は、昔続々と東の諸省に運送されたが、今は関税や運輸など種々の制限を受けざるを得なっている」[57] と述べている。この文章は明らかに 1932 年３月１日満州国成立後の状況について語ったものであった。注意に値するのは、上述の二つの文章の著者は中国本部を中性的な地理用語として理解しており、「中国本部」の使用について問題があるとは思わなかったということである。

四　顧頡剛と費孝通の「本部」、「辺疆」等の言葉をめぐる論争

「中国本部」という言葉が中国語として定着した後、「辺疆」（また「辺疆民族」という表現もある）と対応する概念として流行するようになった。「本部」、「辺疆」などの言葉に真っ先に反対を唱えた学者は顧頡剛である。顧頡剛は 1930 年代に一連の文章を発表し、中華民族が一致団結して外国の侮りに抵抗すべきだと強調した。顧は 1937 年１月 10 日『申報』の「星期論壇」に「中華民族の団結」という文を発表し、「中国の版図にただ中華民族という一つの民族しかない。……離れれば皆傷つき、合すれば共に繁栄する」[58] と主張している。1939 年２月 13 日に顧はさらに「中華民族は一つである（「中華民族是一個」）」を書いた。この文章は『益世報』の『辺疆週刊』に掲載された。顧は冒頭で「凡そ中国人であれば皆中華民族である。中華民族の中から改めて民族を析出すべきではない。今後我々は『民族』という言葉の使用に慎重でなければいけない」。また、顧は「中国には多くの民族があるのではなく、ただ三つの文化集団――漢文化集団・回文化集団・チベット文化集団――がある。……この三種の文化の中で、漢文化は独創のものであり、チベット文化はインドから取りいれたものであり、回文化はアラビアから取りいれたものである。すべての中国人は彼の信仰に従って、制限されることなく一つの文化集団に加入することができる」[59]。この文章が掲載された後、各地の新聞に次々に転載され、人々の注目の焦点となった[60]。1947 年になっても、それは南京『西北通訊』の創刊号にもう一度転載

57　羅従豫「九一八事変前東三省与中国本部貿易之回顧」『中行月刊』第７巻第４号（上海、1933）、1 -13 頁。

58　顧頡剛「中華民族的団結」『申報』1937 年１月 10 日、第７版。

59　顧頡剛「顧頡剛自伝」『顧頡剛全集：宝樹園文存』６巻、372 頁に収録された。

60　顧頡剛『顧頡剛日記』（台北：聯経出版公司、2007）第４巻、221 頁、1939 年４月 15 日。「前日『益世報』で二編の論文を発表した。転載者が極めて多いと先ほど神父に教えてもらった。例えば、『中央日報』、『東南日報』、安徽屯溪のある新聞、湖南衡陽のある新聞、貴州のある新聞は全てそうである。先日李夢瑛の手紙を受け取って、『西京平報』にも転載されたことを知った。この二つの文章はこれほど注目されたとは思いもよらなかった。また万章の手紙も受け取って、広東のある新聞にも掲載されたと知った」。

された。編集者は「顧先生のこの文章は、引証が詳細で該博であるとともに、議論が正大であり、民族団結を促進するための最も有力な作品である。先生の溢れた熱意はとりわけ人を感動させた」[61] と述べている。

顧頡剛は「中華民族は一つである」と力説した一方、「中国本部」という言葉を批判した。顧から見れば、それは帝国主義が中国を分裂させ、国民を欺くための宣伝方法にほかならなかった。顧は、自分が 1934 年に「禹貢学会」を創設し、『禹貢半月刊』を発行した時に、すでにこの課題に注目したことを明らかにしている。「刊行の辞」において、彼は「民族と地理の両者は不可分の関係にある。我々の地理学が発達しなければ、民族史の研究はどうやってその根拠を得ることができようか。他はさておき、ただ我々の東の近隣を見よう。彼らは我々を侵略する下心があるため、『本部』の名を作り上げて我々の十八省を呼び、辺境の地は我々がそもそも有したものではないことを暗示している。バカな我々はなんと彼らに麻酔をかけられたように、あらゆる地理教科書でこのように呼称することになった」と述べている。『禹貢半月刊』の刊行目的の一つはまさにこの謬論に対して、学理的に反駁することである [62]。1938 年 10 月 18 日のある講演の中で、顧頡剛は、日本人は中華民族を分裂させるために、「中国本部」の名目を立てて、また「満蒙は中国領土にあらず」論を借りて、「東北強奪を実行」しようとしたことに再び言及した。

> 日本人は我が国の地理上、公然と「中国本部」という名称を作り出した。我々は歴史上「本部」という言葉を一度も見たことがない。秦漢時に我が国の版図が最も広かった。南は安南まで、東は朝鮮までに至った。元の時の境域はヨーロッパとアジアの両大洲をまたがった。中央政府には十一個の行中書省があったが、本部の名称はなかった。これは日本人がこれらの言葉を利用して、我々を分裂させようとする姦策にほかならない [63]。

その後、顧はまた「『中国本部』の名は早急に廃棄すべきである（「『中国本部』一名亟応廃棄』）」、「『本部』と『五族』の二つの名詞に対する再論（「再論『本部』和『五族』両個名詞」）」等の文章を書いた。この二つの文章は彼が「本部」問題に対する系統的な説明であり、彼の「中華民族は一つである」という観点と呼応している [64]。

61　顧頡剛「中華民族是一個」『西北通訊』第 1 号（南京、1947）、3－7 頁。

62　顧頡剛「発刊詞」『禹貢半月刊』1 巻 1 号（北平、1934）、2 頁。

63　顧頡剛「考察西北後的感想」『顧頡剛全集：宝樹園文存』4 巻、85 頁に収録された。これは 1938 年 10 月 18 日に中央政治学校附属蒙蔵学校で行われた講演である。

64　顧頡剛「「中国本部」一名亟応廃棄」『顧頡剛全集：宝樹園文存』4 巻、88-93 頁に収録された。顧頡剛「再論『本部』和『五族』両個名詞」『顧頡剛全集：宝樹園文存』4 巻、117-122 頁に収録された。

もともと天津にあった『益世報』は戦争のために 1938 年 12 月に昆明に移った。12 月３日に顧頡剛は環城東路のカトリック教会で司教于斌と神父牛若望と面会し、「国事及び週刊の事について話した」。その結果、双方は『益世報』で「辺疆週刊」コラムを設けることを決めた。12 月９日に方豪と牛若望は「『辺疆週刊』を作るために」また顧頡剛を訪ねた。18 日に顧頡剛は日記に「『益世報』社に牛若望神父を訪ねた」[65] と書いた。19 日に「辺疆週刊」が発刊され、顧頡剛は「昆明「辺疆週刊」刊行の言葉」を著して、以下のように述べている。

> 九・一八以前、日本人は早くも地図において満蒙を彼らの本国と同じ色で染めたにもかかわらず、我が国人は見れども見えず。……私たちはこの刊行物を創ったのは、一般の人々に自分たちの辺疆に対してある程度認識させ、学者たちに我々の民族史と辺疆史を片時も忘れさせないようにするためである。……そして野心国家の侵略に共同で抵抗する。中華民国の全部の領土が一つの政権の統治下に置かれ、辺疆も中原になるまで、我々は決して手を止めない[66]。

上述から分かるように、顧頡剛の核心的な趣旨は領土の分裂を防止することにあり、彼は将来「辺疆」を中原に転換させ、全国が団結して一つの完全なる国家になることを望んだのである。12 月 20-21 日に、顧頡剛は日記で「学校に着き、『中国本部という名詞は早急に廃棄すべきである』を書き終えた。計三千六百字。すぐ写し取ったが、終わっていない」、「帰ってきて、論文を写し取り続け、終えた」[67] と書いた。後にこの文章は 1939 年１月１日『益世報』の「星期評論」に掲載された。1939 年１月 27 日に『中央日報』は彼が『益世報』に掲載した「「中国本部」の名は早急に廃棄すべきである」を転載した。この文章は 1939 年２-３月の間にまた多くの新聞や雑誌――例えば、紹興『前線旬刊』と寧波『復興旬刊』――によって転載された[68]。

顧頡剛によれば、「中国本部」という言葉の中国での使用は約 40 年前（1898-1900 年前後）に始まったものである。それは日本の教科書に由来し、日本人が中国を侵略するための「悪意的な宣伝」だったという。これは史実と一致している。しかし、彼の「西洋人は日本人がでっち上げた名詞を受け入れて、同じく「中国本部」を China Proper に翻訳した」という見方は史実と食い違っている。実際、この言葉は日本が西洋語から翻訳したも

65　顧頡剛『顧頡剛日記』第４巻、169、171、174 頁。

66　顧頡剛「昆明『辺疆週刊』発刊詞」『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、321 頁に収録された。

67　顧頡剛『顧頡剛日記』４巻、174-175 頁。

68　顧頡剛「「中国本部」一名亟応廃棄」『前線』第２巻第２号（紹興、1939 年 12 月 21 日）、21-24 頁。顧頡剛「「中国本部」一名亟応廃棄」『復興旬刊』第８、９号合併号（寧波、1939 年３月 21 日）、２-３頁。

のである。顧は以下のように述べている。

> 中国の歴代の政府はかつて、ある地域を「本部」として規定したことはない。中国の地理学者たちもこれまで、国土のある部分を「本部」に定めたことはない。40 年前、我々自分の地理書には、この本部という呼び方をなおさら見たことはない[69]。

> 中国本部という名詞は、一体誰の筆の元より創られたのか。ここに書籍が足りず、考証しようもない。ただ知っているのは、我々の地理教科書は日本の地理教科書から翻訳したものであり、その名詞も日本の地理教科書から写したものである。……西洋人は日本人がでっち上げた名詞を受け入れ、同じく「中国本部」を「China Proper」に翻訳した。これは極東の歴史に習熟していないことによる誤解かもしれないし、或いは侵略の意図を持って故意に彼らのために事を煽り立てようとしたかもしれない[70]。

顧頡剛によれば、この言葉が流行った後、多くの人は中国は中国本部だけだと思うようになり、多くの辺境地域が次第に中国領土でなくなっていった。それは日本人が「歴史を偽造し曲解することによって、我々の土地を奪い取ろうとする証拠である」。顧はとりわけ日本京都大学の矢野仁一教授（1872–1970）の「満蒙は支那に非ず」論（「満蒙非中国」論）を取り上げた。矢野の観点はまた首相田中義一（1864–1929）などの日本政治家にも影響を及ぼした。顧頡剛によれば、田中は天皇への上奏文で「所謂満蒙というものは、歴史に依れば中国の領土でもなく、中国の特別地域でもない。……此の事はすでに帝国大学によって世界に発表されたのである」と述べている。「田中は上奏文の中でまたこのように述べている。『我が矢野教授の研究発表は正当なものであるため、故に中国学者は我が帝国大学の立論に反対する者はいない』」[71]。これに対して、顧頡剛は次の見解を示している。「日本の明治天皇が政策を立てて、中国を征服するために必ずまず満蒙を奪い取らなければいけない。そのために、中国本部という名詞を無理やりに作り上げ、辺疆を本部の外に析出して、もって中国人及び世界の人々を欺こうとした。その結果人々は、日本人が垂涎しているのはただ中国本部以外の地域だけであり、中国の根本を損なっていない、と思うようになったのである」[72]。

「本部」という言葉が中国に与えた影響について、顧頡剛は以下のように語っている。

69　顧頡剛「「中国本部」一名亟応廃棄」『顧頡剛全集：宝樹園文存』 4 巻、90 頁に収録された。

70　顧頡剛「「中国本部」一名亟応廃棄」90–91 頁。

71　顧頡剛「「中国本部」一名亟応廃棄」90–91 頁。

72　顧頡剛「「中国本部」一名亟応廃棄」91 頁。

彼らの宣伝が中国に伝えられた後、我々はわなにかかった。皆「本部」の地域は我が国の固有領土であり、自分たちと密接な関係にあると感じているが、「本部」以外の地域はそもそも寄せ集められたものだったため、有すれば無論喜ばしいが、無くても惜しむに足りず、「ほっておこう」と思っている。こうなったことにより彼らが一歩一歩の侵食を深めるのに対して、我々の抵抗心はだいぶ減った[73]。

「本部」を言うと、東三省、内外モンゴル、新疆とチベットはみな中国の領土でなくなるとすぐ人に感じさせる。そうなったら、中国は放棄しても構わず、帝国主義者は思い切って侵略してもよいということになってしまう。これは聴衆の感情的反応を刺激する方法を利用して、我々の土地と人民を奪い取ろうとしているのではないか[74]。

顧頡剛は「中国本部」概念を批判しただけではなく、「辺疆」という言葉をも疑問視した。それは傅斯年の影響があったと考えられる。傅斯年は顧頡剛主編の『益世報』の特別欄――「辺疆週刊」――に「辺疆」という言葉の使用に対して不満があった。1939 年２月１日に、傅斯年は顧頡剛に宛てた手紙の中で、「辺疆」という言葉を慎重に使用しなければいけないと書いた。「辺人は昔からの卑称であり、辺地は古より未開化の異名であった。雲南の読書人はその感覚を持っていないわけではない。ただ雲南人は四川人、広東人のように怒り出しやすいわけではないだけである」。また、傅斯年は刊行物名を「雲南」、「地理」、「西南」に換え、「辺疆」という言葉を廃止するよう勧めた。また、傅は「民族」の使用についても心がけなければいけないと指摘し、「種々の民族の名目を設ける」ことによって、分裂を招くようなことをしてはいけないと注意した[75]。

顧頡剛は明らかに傅斯年の指摘を心に刻んだようである。２月７日に彼は日記の中で、「昨日孟真の手紙を受け取った。私が『益世報』で辺疆周辺を創って、中華民族の多民族的構成を分析した論説を多数掲載したことは、分裂の禍を招くに足りると私を責めた」[76]と書いた。数日後、傅斯年の観点の刺激を受けて、顧頡剛は上述の「中華民族は一つである」という文章を書いた。1942 年顧頡剛は「成都「辺疆週刊」の発刊の辞」の中で、辺疆研究の理想は「辺疆」、「辺民」等の「庶子に類する」名詞を取り除くことだという見解を再び示し、以下のように述べている。

73　顧頡剛「「中国本部」一名亟応廃棄」90 頁。

74　顧頡剛「再論『本部』和『五族』両個名詞」『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、118 頁に収録された。

75　傅斯年「傅斯年致顧頡剛」『傅斯年遺札』（北京：社科文献出版社、2014）721-722 頁に収録された。

76　顧頡剛『顧頡剛日記』第４巻、197 頁。

私たちは立ちあがって、辺疆についてできる限りのことをする。……我々は対外的に自由を勝ち取るために、まず対内に団結を強めなければいけない。その時になると、我が国の領土は完全なものになり、辺疆という不祥な名詞が二度と存在しなくなる。また、我が国の民族は完全なものになり、辺民という庶子に類する名詞が二度と存在しなくなる。これこそ我々の理想的な境地である[77]。

本部と辺疆（辺民）以外にも、顧頡剛はさらに多くの言葉を疑問視した。例えば、「漢人」、「漢族」、「五大民族」（「五族共和」）である。顧は「漢人」、「漢族」にとって代えて「中華民族」を使用することを希望し、同時に「漢人」、「漢族」と「本部」との間の関連性を断ち切ろうとした。彼は次のように述べている。「漢人という二文字は筋が通らないと断言しても良い。……我々漢人と呼ばれている者は、血統は同源ではないし、文化も一元的なものではない。我々はただ同じ政府のもとで共同生活をしているだけである。……現在、この中華民族という最も適切な名を有しているため、我々は以前の不合理な漢人という呼び方を捨てるべきであり、交通不便のせいで生活様式が少々異なる辺地の人民とともに、同じ中華民族の名のもとに団結しなければいけない」[78]。また、「漢人の文化に伝統があるとはいえ、それも無数の文化の混合によるものである。漢人の体質は特殊なところがあるとはいえ、それも無数の体質が混じり合ったものである。……漢人の体質にすでに蒙、蔵、纏回の血液が多く混ざっている」[79]。

顧頡剛は「漢族」の概念をも批判した。彼は次のように述べている。「漢人が一民族になるのは、血統的な根拠があるのか。それが一つの純粋な血統だと証明できる根拠があったとしても、ただ一つの種族であり民族ではない。もし研究の結果、それは一つの純粋な血統ではなく、満、蒙、回、蔵、苗……の血液を大量に含んでいるならば、それは一つの種族とはとうてい言えない。一つの種族ではないにもかかわらず、団結の情念に富んでいる場合、それは一つの民族に違いない。何の民族かと言えば、中華民族である」[80]。「中国の各民族が数千年の進化を経て、純粋な血統を持つ民族はとっくになくなった。とりわけ『漢族』という名詞は実に筋が通らない。なぜなら、それは四方の異民族の混合によって構成されたものであり、漢族など存在しないからである」[81]。顧頡剛の見方は傅斯年と一致している。傅斯年もまた、「『中華民族は一つである』という大義を努めて発揮し、夷・

77　顧頡剛「成都辺疆週刊発刊詞」『顧頡剛全集：宝樹園文存』4巻、329頁に収録された。

78　顧頡剛「中華民族是一個」『顧頡剛全集：宝樹園文存』4巻、97-98頁に収録された。

79　顧頡剛「我為什麽要写『中華民族是一個』」『顧頡剛全集：宝樹園文存』4巻、113頁に収録された。

80　顧頡剛「続論『民族』的意義和中国辺疆問題」『顧頡剛全集：宝樹園文存』4巻、128-129頁に収録された。

81　顧頡剛「顧頡剛自伝」『顧頡剛全集：宝樹園文存』6巻、372頁に収録された。

漢が一家だということを証明すべきである。それは漢族の歴史をもって証拠とすることができる。我々自身も、北の人は胡人の血統がないと誰が断言できようか、南の人は百粤、苗、黎の血統がないと誰が断言できようか」[82] と述べている。

同じ理由に基づいて、顧頡剛はさらに「五大民族」にも疑義を呈して次のように語っている。「五大民族という名は、その危険性が中国本部という名詞と同じである。……だが、五大民族は敵によってつくられたものではなく、中国人の自縄自縛の結果である」[83]。「五大民族という名詞は似て非なるものであり、それに客観的に対応する実体はない。満人はもとより一つの民族ではなく、今日において……すでに完全に漢人の中に融け込んでいる。たとえ昔でも一つの民族としての条件が備わっていなかった」[84]。「自らの不謹慎のせいで、誤ったことが誤り伝えられたことによって、悪い結果を招いて、……辺疆における種々の危機を引き起こしたのである」[85]。

顧頡剛はさらにほかの「名詞を作り上げて我々を分裂させようとする事例」についても言及した。例えば、日本とロシアは満洲を争奪するために、「両国は協調して不正の利益を分けた結果、南満と北満という名詞が生まれた」。また、英国は勢力をチベットに及ぼしたあと、チベット内政を干渉しないように中国政府に要求して、「内蔵と外蔵という名詞を提起した」[86]。さらに、「華北五省」は日本人が河北、山東、山西、チャハル、綏遠を合わせた呼称である。「それはこの五つの省が満洲と東蒙に近いためである。……彼らは、この五省がもっと早く東北四省のあとを追うように促して、もう一つの傀儡国家を創り出そうとしている。……華北五省の特殊化と明瞭化を促しばかりしている」[87]。銭穆も顧の意見に呼応し、「東三省」及び「華南、華中、華北等の呼称」を批判し、分裂作用をもたらす恐れがあると指摘した[88]。

要するに、顧頡剛によれば、本部という言葉は日本人によってつくられたものであり、約 1900 年前後に中国に伝えられ、中国語世界で流行ることになった。顧は論文を著して本部概念の裏に隠れた国際政治の要素を分析した。彼から見れば、これらの名詞は、全て

82　傅斯年「傅斯年致顧頡剛」『傅斯年遺札』722 頁に収録された。

83　顧頡剛「中華民族是一個」『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、95 頁に収録された。

84　顧頡剛「再論『本部』和『五族』両個名詞」『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、120 頁に収録された。

85　顧頡剛「中華民族是一個」『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、98-99 頁に収録された。

86　顧頡剛「再論『本部』和『五族』両個名詞」『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、118 頁に収録された。

87　顧頡剛「再論『本部』和『五族』両個名詞」『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、120 頁に収録された。日本人によって作られた「華北」という概念について、本庄比佐子・内山雅生・久保亨編『華北の発見』（東京：東洋文庫、2013 年）を参照されたい。

88　銭穆『中国歴代政治得失』100 頁。

帝国主義者が中国を侵略し自らの利益を獲得するために作りだしたもので、中国を分裂させようとしたものである。それゆえ、顧の議論の主旨は、中国の領土に対する日本の野心に反対するためであり、それは彼や傅斯年が強調した「中華民族は一つである」という観点を支えるものでもあった。清末民初の民族観念の展開から見れば、顧が 1939 年に提起した一元的中華民族観は、一方では、清末の「種族革命」と民国初期以来の「五族共和」論を批判し、他方では、1943 年蒋介石の『中国之命運』の中の民族論に通じており、相互に呼応しているところがある[89]。

上記の顧頡剛の観点は費孝通の批判を受けた。費孝通の批判の焦点は顧が主張していた「本部」観念と日本の侵略という主張にあったわけではなく、「中華民族」は一つであるか否かという点にあった。「名詞」は分化の役割を果たすことについて、費孝通は同意しなかったのである。つまり、費にとって、地理的名詞の政治的意味合いは重要ではなかった。費によれば、分化の発生は、自分自身の内部の矛盾が敵に利用されたためであった。こうして、顧頡剛と費孝通との間の議論の争点は、国際間の領土争奪の問題から国内の民族問題に移った。費孝通は「民族問題に関する議論（「関于民族問題的討論」）」（1939 年４月９日に書かれ、５月１日『益世報』「辺疆周辺」第 19 期に初めて掲載された）の中で、顧頡剛の上述の議論に異議を唱えた。費から見れば、顧の目的は「文化、言語、体質上の分岐によって、政治的な統一に影響を及ぼすべきではない」[90] ということであった。顧の観点に対して、費は次のように主張している。すなわち、中華民族は団結し一致して日本に抵抗すべきだが、一方、学理的な観点からして、中国は多くの民族を有する国家だということを認めるべきであり、少数民族が客観的に存在している事実は尊重されるべきである。抗日だからといって、中国国内における異なる文化、言語、体質を有する集団の存在を必ずしも否認する必要はない。異なる文化、言語、体質を有する人々が共通の利害を持ち、内に安定を求めて、外に安全を求める需要さえあれば、自然に一つの政治団体を結成することが可能である。そのため、政治的な平等の実現こそは民族問題を解決するための鍵である。政治的な統一を求めることは、各民族及び経済集団の間の境界線を取り除くことではなく、それらの境界線から生じた政治的な不平等を取り除かなければならないことである。このような考え方は彼が後に提起した「中華民族多元一体構造」の観点と連続している。

費孝通はまた顧頡剛が「中国本部」、「五大民族」等の名詞に関する議論についても疑義を呈した。顧頡剛は次のように指摘している。「『我々にはただ中華民族という一つの民族しかなく、しかもずっと昔からこの中華民族を有してきた』ため、地理上の『中国本部』、

89　黄克武「民族主義的再発現：抗戦時期中国朝野対「中華民族」的討論」中国社会科学院近代史研究所編『近代史研究』総 214 号（北京、2016）、20-25 頁。

90　費孝通「関于民族問題的討論」『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、136 頁に収録された。

民族上の『満漢蒙回蔵』などの言葉に符合するような客観的事実はない。これらの名詞は『帝国主義者によって作り上げられた』ものだったか、または『中国人の自縄自縛』の結果であり、いずれも『分化』作用をもたらすものである」。これに対して、費孝通はまず、名詞の意味、及び名詞がもたらしうる分化作用に対して疑義を呈した。費によれば、「民族」は事実に符合しない団体ではない。顧は nation（民族）、state（国家）と race（種族）等の観念を区別しておらず、「先生の所謂『民族』は通常の『国家』に相当し、先生の所謂『種族』は通常の『民族』に相当する」。費から見れば、一つの集団や組織はもし健全であれば、空洞の名詞によって容易に分化されることはない。人々は「スローガンの力」を信じすぎてはいけない、「これらは全て名詞の役割をあまりにも重視しすぎるためであり、呪術信仰の疑いがある」。費孝通からすれば、名詞の使用に心がける以外に、より重要なのは、「我々にとっての課題は次のことを検討することである。すなわち、どのような客観的な事実が他人に名詞をもって我々の国家を分化させるという事態をもたらしたのか、我々の過去の『民族』関係がどうだったのか、『各種民族』の境界線が国家の一致団結の障碍になる事態を招くような腐敗や隔たりの情況があるか否か、などである」[91]。

実際、費孝通は抗日戦争と建国にとっての顧頡剛の観点の重要性をよく理解していた。そのため、顧頡剛が費孝通に応えるために「本部と五族の両名詞の再論（「再論本部与五族両個名詞」）」、「民族の意義と中国辺疆問題の続論（「続論民族的意義和中国辺疆問題」）」を書いた後に、費孝通はそれ以上議論を続けなかった。1993 年に顧頡剛誕生百周年学術討論会に参加した際に、費孝通は講話の中で、その時の顧頡剛との論争を回想して、以下のように述べている。

> 後になって分かったが、愛国の情熱に燃えた顧先生は、日本帝国主義が東北で「満州国」を成立させ、内モンゴルで分裂を煽動したことに対して、義憤が胸中に満ち、「民族」を利用して我が国を分裂させようとした侵略行為に極力反対した。私は彼の政治的立場を完全に擁護した。一方、彼の見方、すなわち、満、蒙が民族だと承認することは自縄自縛であり、或いは、帝国主義に我が国を分裂させる口実を与えることになるという見方には同意できなかった。また、これらの「民族」を承認さえしなければ、敵を内部に引き入れて災いを招くことが避けられるという彼の観点に対しても、私はやはり同意できなかった。原因は口実にあるわけではなく、口実を与えないようにしても人に手を出させないようにすることはできないのである。しかし、政治に波及するこの論争は当時の形勢に有利ではなかったため、私はそれ以上文章を書いて論争することをしなかった[92]。

91　費孝通「関于民族問題的討論」『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、140 頁に収録された。

92　費孝通「顧頡剛先生百年祭」『費孝通全集』（フフホト：内蒙古人民出版社、2009）14 巻、269-

費孝通の言葉は、なぜ抗日戦争の後期に、外国の侮りに抵抗しようという共通認識のもとで、本部―辺疆に関する議論が徐々に重視されなくなったのか、ということに対する説明となろう。1940 年以後、「中国本部」という言葉はただ少数の経済統計に関する文章の中で地理名詞として使用されていただけである。1945 年抗日戦争の勝利後、帝国主義による脅威の解除、中華民族という概念の拡大、近代国家の確立につれ、この言葉は次第に使われなくなった。現代英語のなかで China Proper の使用が減り、中国語の中でも「中国本部」という言葉はほとんど使われなくなった[93]。

五　結論

近代中国における「中国本部」概念の変遷は二つのルートがある。一つは元明清以来の地方制度と関わっている。例えば「内地」、「中土」、「十五省」、「十七省」、「十八省」等の観念の移り変わりである。もう一つは西洋の中国研究における China Proper という言葉の多重翻訳の歴史と関わっている。両者は入り交じって「本部十八省」となり、一つの「新名詞」を成した。China Proper という言葉の翻訳歴史について、中国語と西洋語の文献からその概要を整理することができる。すなわち、ヨーロッパからロシアへ、さらにロシアから日本へ、最後に梁啓超の『時務報』と『清議報』、維新派の『知新報』等の刊行物による翻訳を経由して、中国に取り入れられた。これらの言葉は 20 世紀の中国でさらに非常に複雑な変化過程を経た。20 世紀における中国本部、辺疆等の言葉の伝播は、新聞、雑誌や教科書等の流通と関わっている。これらの概念は西から東への翻訳、伝播の過程のなかで、政治家や学者の間の議論をも促した。例えば、清末の革命志士はこれらの概念をもって「種族革命」を主張し、一方の改良派は「五族共和」を力説した。1930 年代に、顧頡剛は日本学者の矢野仁一などと中国本部・辺疆、及び満蒙問題について対立し、費孝通はさらに多元的視角から顧頡剛の一元的中華民族観を批判した。1930–40 年代における本部をめぐる論争は、中華民族をめぐる議論の一環であった。また、後に国民党と共産党の民族観の違いもここに根を持った。一方、国民党は顧頡剛の「中華民族は一つである」という主張を肯定し、他方、共産党は費孝通が後に構築した「中華民族多元一体格構造」の民族観を支持した。20 世紀以降の東アジアにおける境域の変遷、及び近代中国の国家形成は上述の議論と密接に関連している。今日から見れば、顧頡剛と費孝通が提起した二つのパターンは、前者は一元的な統一と民族境界を取り除くことを強調し、後者

---

270 頁に収録された。

93　注意に値するのは、ウィキペディアに掲載された「China Proper」項目の中国語版がもともと「中国本部」を採用したが、最近は「漢地」に変わったのである。「中国本部」という言葉はすでに使われなくなったからであろう。

は多元的でありながら一体であることを重んじる。1949 年以降、スターリンの民族理論に基づいた「民族の識別」による「民族の構築」の事業は、実際、エスニック・グループの民族意識と民族的アイデンティティを強めたこととなった。この理論は費孝通の「多元一体」の主張と符合するものであった。しかし、多元と一体との矛盾は今日、各種の民族問題を引き起こしている。馬戎が述べているように、「中国の民族構築（nation-building）は一体、『中華民族』を単位とすべきか、それとも政府によって識別された 56 個の『民族』を単位とすべきか。今日に至っても、この問題はいまだ真に解決されていない」[94]。このような現状に対して、習近平は「四つのアイデンティティ（「認同」）」（偉大な祖国・中華民族・中華文化・中国特色のある社会主義の道路に対する自己同一化）を強化し、各民族間の交際（「交往」）・交流・融け合い（「交融」）という「三交」を促進することを唱えている。のちにこれに加えて、さらに「中国共産党に対する認同」が追加され、「五つの認同」という説となった[95]。習の説は実際、顧頡剛の理論とより多くの類似性がある。いかに「五つの認同」を強化すると同時に、各民族の文化的相違に対する尊重を排斥しないようにすることができるのか、また、「公民認同」や「公民意識」は特定の政党に対する「認同」と協働して、エスニック・グループ間の対立をとりなすことができるのか、これらの問題に対して我々はさらに思索し議論していく必要がある。

参考文献

中国語文献

［日］古城貞吉訳「中国辺事論」『時務報』第 12 冊（上海、1896）、20-23 頁。
――「中国辺事論（続第十二冊）」『時務報』第 15 冊（上海、1897）、19-22 頁。
［日］肥塚龍「支那保全及満洲処置（未完）」『清議報』第 75 冊（東京、1901）、4735-4740 頁。
V.G.T. 生「大勢：英徳於揚子江之競争」『江蘇』８号（東京、1904）、81-87 頁。
王柯『民族主義与近代中日関係：「民族国家」、「辺疆」与歴史認識』香港：中文大学出版社、2015。
呂志伊「論国民保存国土之法」『雲南雑誌』王忍之等編『辛亥革命前十年時論選集』２巻下冊、北京：三聯書店、1977、823-833 頁に収録された。
門多薩『中華大帝国史』北京：中華書局、1998。
倪菊裳「中華民国的国土演説」上海新北門振武台国民教育実進会『軍中白話宣講書』第４編、上海：商務印書館、1911、７-11 頁に収録された。
孫文「手製支那現勢地図識言」秦孝儀編『国父全集』６冊、台北：国父全集編輯委員会、1989、547-548 頁。

94　馬戎「如何認識『民族』和『中華民族』――回顧 1939 年関于「中華民族是一個」的討論」『「中華民族是一個」――囲繞 1939 年這一議題的大討論』（北京：社科文献出版社、2016）24 頁。

95　「「五個認同」：従思想上増強各民族大団結」中央統戦部ウェブサイト http://www.zytzb.gov.cn/tzb2010/S1824/201710/1a269b48e7b54125a3e1216c97597d2d.shtml（最終閲覧日：2019 年 11 月 20 日）。

徐珂『清稗類鈔』上海：商務印書館、1917。
秦孝儀主編『総統蔣公大事長編初稿』１巻、台北：中国国民党党史委員会、1978。
馬戎「如何認識『民族』和『中華民族』――回顧 1939 年関于「中華民族是一個」的討論」『「中華民族是一個」――囲繞 1939 年這一議題的大討論』北京：社科文献出版社、2016、１-28 頁。
張永「従「十八星旗」到「五色旗」――辛亥革命時期従漢族国家到五族共和国家的建国模式転変」『北京大学学報（哲学社会科学版）』39 巻２号（北京、2002）、106-114 頁。
梁啓超「論支那独立之実力与日本東方政策」『清議報』第 26 号（東京、1899）、５-８頁。
章炳麟『章太炎全集：太炎文録初編』上海：上海人民出版社、2014。
陳天華『獅子吼』鄒容・陳天華『革命的火種：鄒容、陳天華選集』黄克武、潘光哲主編『十種影響中華民国建立的書刊』台北：文景書局、2012 に収録された。
陳波「中国本部概念的起源与建構――1550 年代至 1795 年」『学術月刊』2017 年第４号（上海）、145-166 頁。
――「日本明治時代的中国本部概念」『学術月刊』2016 年第７号（上海）、157-173 頁。
傅斯年「傅斯年致顧頡剛」（1939 年２月１日）『傅斯年遺札』北京：社科文献出版社、2014、721-722 頁に収録された。
費孝通「関于民族問題的討論」『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、北京：中華書局、2011、133-140 頁に収録された。
――『費孝通全集』フフホト：内蒙古人民出版社、2009。
黄克武「民族主義的再発現：抗戦時期中国朝野対「中華民族」的討論」中国社科院近代史研究所編『近代史研究』総 214 号（北京、2016）、４-26 頁。
鄒容『革命軍』鄒容・陳天華『革命的火種：鄒容、陳天華選集』黄克武、潘光哲主編『十種影響中華民国建立的書刊』台北：文景書局、2012 に収録された。
漢駒「新政府之建設」『江蘇』第５号（東京、1903）、７-33 頁、第６号（東京、1903）、23-32 頁。
銭穆『中国歴代政治得失』台北：三民書局、1976。
鄺其照『華英字典集成（*An English and Chinese Dictionary*）』香港：循環日報、1899。
鄺其照著・内田慶市、沈国威編『字典集成：影印与解題』北京：商務印書館、2016。
顔恵慶『英華大辞典』上海：商務印書館、1908。
羅従豫「九一八事変前東三省与中国本部貿易之回顧」『中行月刊』第７巻第４号（上海、1933）、１-13 頁。
顧頡剛「「中国本部」一名亟応廃棄」『前線』第２巻第２号（紹興、1939 年 12 月 21 日）、21-24 頁。
――「「中国本部」一名亟応廃棄」『復興旬刊』第８、９号合併号（寧波、1939 年３月 21 日）、２-３頁。
――「中華民族的団結」『申報』1937 年１月 10 日、第７版。
――「中華民族是一個」『西北通訊』第１号（南京、1947）、３-７頁。
――『顧頡剛日記』第４巻、台北：聯経出版公司、2007。
――『顧頡剛全集：宝樹園文存』４巻、６巻、北京：中華書局、2011 年。
――「発刊詞」『禹貢半月刊』１巻１号（北平、1934）、２-５頁。

英語文献

Hemeling, Karl Ernst Georg, ed. *English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language and Handbook for Translators, Including Scientific, Technical, Modern, and Documentary Terms*. Shanghai: Statistical Department of the Inspectorate General of Customs, 1916.

Lobscheid, Wilhelm（羅存德）. *English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation*（《英華字典》）. Hong Kong: The Daily press office, 1866–1869.

Mair, John. *A Brief Survey of the Terraqueous Globe*. Edinburgh: Printed for A. Kincaid & J. Bell and W. Gray, Edinburgh, and R. Morison and J. Bisset, Perth, 1762.

Marshal, Alex. *The Russian General Staff and Asia*. London: Routledge, 2006.

Smollett, Tobias George. *The Present State of All Nations*. London: Printed for R. Baldwin, No. 47, Paternoster-Row; W. Johnston, No. 16, Ludgate-Street; S. Crowder, No. 12; and Robinson and Roberts, No. 25, Paternoster-Row, 1768–69.

Toby, Ronald P. *State and Diplomacy in Early Modern Japan: Asia in the Development of the Tokugawa Bakufu*. Stanford: Stanford University Press, 1991.

Winterbotham, William. *An Historical, Geographical, and Philosophical View of the Chinese Empire*. London: Printed for, and sold by the editor; J. Ridgway, York-Street; and W. Button, Paternoster-Row, 1795.

日本語文献

ア・ヤ・マクシモーフ著『露国东邦策』東京：哲学書院、1896。

ウエニユコーウ著『露国东洋策』東京：哲学書院、1893。

グリウリンヘルド著・菅野虎太訳述『万国地誌略』東京：養賢堂、1874。

プーチャート著「清国辺備に対する露国の攻守論」『東邦協会会報』第 27 号（東京、1896）、1 –15 頁。

――「清国辺備に対する露国の攻守論（承前）」『東邦協会会報』第 28 号（東京、1896）、1 –24 頁。

井上哲次郎『訂増英華字典』東京：藤本氏蔵版、1884。

内田正雄編訳『輿地志略』東京：文部省、1870。

本庄比佐子・内山雅生・久保亨編『華北の発見』東京：東洋文庫、2013。

名取洋之助『中支を征く』東京：中支従軍記念写真帖刊行会東京支部、1940。

安岡昭男「東邦協会についての基礎的研究」法政大学文学部編『法政大学文学部紀要』通号 22（東京、1976）、61–98 頁。

東亜同文会対支功労者伝記編纂会編『対支回顧録』（上）東京：東亜同文会対支功労者伝記編纂会、1936。

東京開成館編集所『開成館模範世界地図』東京：開成館、1930。

東條文左衛門『清二京十八省疆域全図』出版情報不詳、1850。

松山棟庵編訳『地学事始・初編』東京：慶應義塾出版局、1870。

武上真理子「地図にみる近代中国の現在と未来――『支那現勢地図』を例として」村上衛編『近現代中国における社会経済制度の再編』京都：京都大学人文科学研究所、2016、329–367 頁。

狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察（５）第三章 亜細亜協会について、第四章 東邦協会について」『東亜』414 巻（東京、2001）、66–75 頁。

参謀本部管西局編『支那地誌』東京：参謀本部、1887。

陳力衛「なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか」愛知大学中日大辞典編纂所『日中語彙研究』第６号（名古屋、2016）、1 –25 頁。

――『近代知の翻訳と伝播――漢語を媒介に』東京：三省堂、2019、369–390 頁。

富山房編集局『国民百科辞典』東京：富山房、1908。

朝井佐智子「日清戦争開戦前夜の東邦協会：設立から 1894（明治 27）年 7 月までの活動を通して」愛知県：愛知淑徳大学博士論文、2013。

インターネット資料

「「五個認同」: 従思想上増強各民族大団結」中央統戦部ウエブサイト http://www.zytzb.gov.cn/tzb2010/S1824/201710/1a269b48e7b54125a3e1216c97597d2d.shtml（最終閲覧日：2019 年 11 月 20 日）。

「十八星旗」ウィキペディア、https://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%81%E5%85%AB%E6%98%9F%E6%97%97（最終閲覧日：2019 年 11 月 20 日）。

「元清非中国論」ウィキペディア、https://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%85%83%E6%B8%85%E9%9D%9E%E4%B8%AD%E5%9C%8B%E8%AB%96（最終閲覧日：2019 年 11 月 20 日）。

「漢地」ウィキペディア、https://zh.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%89%E5%9C%B0（最終閲覧日：2019 年 11 月 20 日）。

「China Proper」ウィキペディア、https://en.wikipedia.org/wiki/China_proper（最終閲覧日：2019 年 11 月 20 日）。

キーワード　本部、辺疆、華夷秩序、顧頡剛、費孝通